

展示会の裏側で・・・

平成26年6月某日早朝、まだ夜が明けきらぬ西都原を、一台の輸送車が走り去って行く。目的地は東京、大阪、福岡・・・しかもすべて陸路で各地を廻る長い旅の始まりである。

目的は、終了した展示会の借用品の返却と、新たな展示品の借用。今年は開館10周年と、宮崎県教育委員会が2012年から展開してきた「交差する歴史と神話 みやざき発掘100年」の最終年度という節目を迎えることもあり、これまでにない規模の展示会を開催している。主に西都原古墳群と関係する考古資料を展示するのだが、県内外からの借用品も数多く、展示の内容・数量共に半端ではない。中には国宝・重要文化財も含まれるため、運搬にもこれまで同様、細心の注意が必要とされる。

当館では、資料の輸送について、美術取り扱い部門のある運送業者から、エアサスペンションと空調機能のついた美術品専用車（以後、美専車）を、運転手ごとチャーターして行うことが多い。途中の停泊地や、順路等、細かな打ち合わせや、日程調整などを詰めていく。そこに、学芸員も同乗して各地を巡るのである。今回も美専車の旅。それは一時たりとも油断の出来ない旅。しかも今回は、東京で国宝、重要文化財を返却した足でとって返し、関西で次の展示品の借用という、ハードなスケジュールである。ロードムービーのような郷愁やノンビリ感などは、勿論・・・無い！

救いは、美専車の乗り心地の良さと、すべて高速道路という行路の快適さか・・・。

中でも一番緊張感が漂うのは、考古資料の梱包・積み込み、そして、返却の場面である。借用先の担当者の厳しい眼差しの中、貴重資料を扱いなれた業者、学芸員にも、ビリビリとした緊張感が走る。紐の結び方、資料の持ち上げ方など一つ一つの所作に、最も集中力、技術が必要な場面である。裏返せば、学芸員としての最大の見せ場、真骨頂というところかもしれない。借用時もそうだが、返却時も借りる前と比べ、資料に少しでも変化があれば大問題である。それ故細かなチェックを終え、相手方より確認書類にサインを貰った時の安堵感、達成感は半端ではない。

その中を縫うように、展示パネル作成業者との打ち合わせ、ポスター、チラシのデザイン決定と校正、印刷打ち合わせ、図録編集と校正、印刷依頼、講演会の講師依頼や準備等々、担当者はスケジュールをこなしていく。

資料が館に入ると、いよいよ設置作業。展示品が一番美しく、見やすい角度、位置、照明をミリ単位で調整していく。展示室には時計が無い、毎回、集中のあまり時間経過の感覚が麻痺して、気がつけば夜10時、11時を超えることも多い。

来館者の皆様に、県内の考古学の研究成果をより分かりやすく紹介し、宮崎県の文化に誇りを持ってもらえることを願いつつ、こうした業務を裏側でこなしている担当者の並々ならぬ努力と、それを推進していく強い意思のもと、展示会が開かれる。

そのモチベーションとなるのは、展示を見られた方々の喜びの声と表情である。

(岡崎裕也)

